

現代アート研修「ツアー型芸術祭の可能性」

2021年4月20日（火） 第一支部研修終了報告 第一支部運営委員会

今回はオフライン（アートディレクター北川フラム氏が代表を務める（株）アートフロントギャラリー会議室、非会員2名含む17名）とオンライン（非会員5名含む38名）とでの開催となり、委員2名を含めて合計57名の参加となりました。

講師は、アートフロントギャラリースタッフの前田礼さんです。

今や日本各地で見られるようになった現代アートイベントですが、なぜこのように広がったのでしょうか？そしてまた、観光とはどのように関わっていくのでしょうか？

—始まりは新潟の越後妻有：豪雪や過疎化などの問題を抱える新潟の‘越後妻有（えちごつまり）’地域で、アートを核にしてその地域を活性化していこうという試みが始まります。その一環として2000年にスタートしたのが、アートディレクター北川氏による「大地の芸術祭」



でした。当初は地元の人々に現代アートのイベントを受け入れてもらう事は難しく、開催までには多くの困難がありました。しかし、‘アートを道しるべに里山



をめぐる’「大地の芸術祭」という3年に一度の斬新なイベントは、回を重ねる毎に作品数も来場者も増え続け、今年も第8回目を迎えます。

そして、これがベネッセ会長の福武総一郎氏の目に留まり、2010年の瀬戸内国際芸術祭へと繋がります。瀬戸内海をアイランドホッピングしながら作品を巡るこの芸術祭が大人気となったのは皆様もご存知の通りですが、そこには、産業の衰退や環境問題などに苦しむ瀬戸内海の“地域の活性化”と“海の復権”にかける福武氏の強い思いがありました。

芸術祭の魅力は多彩で、アートファンだけを惹きつけるものではありません。来訪者は、



広い地域に点在する作品を巡りながら、その土地の自然、歴史、文化、生活などを体感します。また、地元の人々とアーティストとの協働によってもたらされたサイトスペシフィックな作品の魅力は、そこに行かなければ決して味わうことのできないものです。

—海外との関わり：多くの海外アーティストが出品しているだけでなく、海外からの来場者も増加傾向が続いています。近隣のアジア諸国からはボランティアスタッフとして参加する若者が多く、海外とのつながりは急速に強まっています。特に「大地の芸術祭」では、オーストラリア・中国・香港は作品展示やアーティストレジデンス目的の建物を持ち、国をあげて芸術祭に参加しています。そして今、“大地の芸術祭の海外バージョン”とも言えるものが、中国やスリランカで計画されています。

—今年の芸術祭：今年も、北川氏による4つの芸術祭、「いちほらアートミックス」「大地の芸術祭」「北アルプス国際芸術祭」

「奥能登国際芸術祭」が開催される予定でしたが、「いちほらアートミックス」「大地の芸術祭」は新型コロナウイルス感染拡大により開始延期が決定しています。早く感染が収束する事を願うばかりです。



（今回の研修では、第一支部 小澤志麻会員のご協力を頂きました）